

平成25年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ヒグチ ケンイチロウ
氏名 樋口 謙一郎

研究期間 平成25年度

研究課題名 英国における韓国研究の新たな展開：「グローバルな視野に立った韓国研究」のリデザインの試み

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	樋口 謙一郎	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

近年、韓国の企業や留学人材のヨーロッパ進出の増大と、英国における韓国人人口の増大に伴い、英国の高等教育機関における韓国研究が多様かつ複合的な様相を示しつつあることに注目し、その趨勢を検討する。

今日、韓国の企業や人々のグローバル化・越境化が顕著になるのに伴い、英国の高等教育研究機関の韓国研究部門において研究者の構成やカリキュラム、諸事業にいかなる変化が生じているか、研究者は英国やヨーロッパの社会的文脈のなかで韓国の文化状況や英韓関係にどのような問題意識を有しているかを調査・考察する。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

・第1に基礎的な知識集約と先行研究のレビューのため、英国の高等教育研究機関における韓国研究動向に関する基本資料（日本語、英語、韓国語）の収集・分析を行い、近年における韓国の企業・人々・文化などのグローバル化が英国の韓国研究にいかなる影響をもたらしているのかにつき、文献上で検討する。

・第2に、英国の具体的状況を理解すべく、英国の大学、図書館、関係者にヒアリングを行うとともに、関連する学会・国際会議に出席し、学術的知見を深める。

・第3に、比較教育学の研究者との研究討論を通じて、英国における韓国研究の特徴と意義、展望について検討し、韓国・日本などの研究者と学術価値の共有や研究交流の可能性を模索する。

・研究成果は、学会・国際会議などでの報告、学会誌などへの寄稿により公表する予定である。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

韓国の移民増加や経済的プレゼンスの拡大が、英国を含むヨーロッパの知識社会にいかなる影響を及ぼし得るかという問題を扱った先行研究は皆無に等しい。しかるに、英国がこの数年でヨーロッパで最も多くの韓国人住民を抱える国になったことを考慮すれば、英国と韓国の相互認識を理解していくことは、ヨーロッパの多文化社会の可能性や移民政策の展望、そしてヨーロッパのアジアへのまなざしを考察していく上でも重要である。また、韓国の企業や人々のグローバル化や文化面での海外展開が急速に進むなか、「グローバルな視野に立った韓国研究」を検討していくことは、今日の韓国地域研究者の重大な使命でもある。

このような認識にもとづき、研究期間中、日本、韓国、英国、アイルランドにおいて、研究機関・図書館への訪問、ヒアリング、研究討論などを行うとともに、関係諸国・地域の研究者との対話も重視した。今年度はとりわけ校務の制約が多く、当初予定していた EURKOREA 2013 (Conference on European Perspectives of Korea, Trinity College Dublin) への出席・発表が叶わなかったことは誠に残念であったが、特に英国ならびに周辺ヨーロッパ諸国における韓国語教育の現状については、多くの知見を得ることができた。また、日本比較教育学会においてはラウンドテーブル「比較教育学と韓国研究—方法論と課題—」を企画するとともに司会を務め、研究手法、焦点および研究動向を俯瞰した上で、各様の国籍・問題意識を持つ研究者らとともに、比較教育的な観点から議論を深めた。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①イギリス	②韓国研究	③	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

本研究は今後も継続していくが、その成果は随時、学会・国際会議などでの報告、学会誌などへの寄稿により公表する予定である。なお、下記の学会ラウンドテーブルで、問題意識、研究手法など本研究の構想の一端を紹介した。

・田中光晴、樋口謙一郎企画 (ほか、報告者3人) 「比較教育学と韓国研究—方法論と課題—」、日本比較教育学会第49回大会 (上智大学)、2013年7月5日